

卒業生に
贈る
言葉

厳しい時代に
門出されるときに



松山義則
総長

ご卒業をお祝い申し上げます。長い年月にわたる学校生活を終えられ、みなさんはその見識と教養を自らのものとして大学を卒業されることとなりました。いま社会に門出される節目に立つておられます。

卒業されるこの春の世相はすでに十分ご認識のように、まことに厳しい時代であります。少子高齢化の人口動態の問題をとりあげてみても、これは社会のあらゆる側面に影響し、構造的変革をもたらし、今後永続して深刻な事態を恒常化することになります。このような社会に立ち向かわれるときに、われわれは自分の眼でものごとを把握し、判断し、行為しなければなりません。自己とそれをとり囲む環境は、ある程度

の法則性にしたがって動くように見えます。近代科学は自然科学のみならず、社会の未来あるいは人間の行動を予測しそれを統制できると考えています。しかし自己とその環境との未来のあり方を的確に予測することは実のところむずかしく、その適合率に一定の信頼性があるにしても決して完全なものではありません。

人間の行動や心の動きを理解するために、人間行動を支配する要因に四つのことを考えた研究者があります。第一に、環境がもつ課題性の難易度です。わたくしたちはその生涯を自分を取り囲んでいる環境のなかで人生を営みますが、どのような問題に遭遇するか、それが自分にとつて解決しやすい課題であるかむずかしいかによってわれわれの人生は支配されます。日々直面し、解決しなければならぬ課題の難易度はたしかに大きな原因であります。人間は生きるかぎり問題をかかえてその解決にいどんでいかねばなりません。第二には自分もつ能力です。知的に高い能力をもつ人は低い能力に比べて問題解決の可能性は高いと言うことができます。一定の専門知識やスキルを豊かにもつ人、教養の広さに生きる人は、そうでない人に比較して問題解決は容易であると思います。人間が個々にもつ能力は人間行動を決定する要因です。第三にその人にまわってくる運不運を考慮することができます。幸運のとき、不運のときによって問題は処理されあるいは不処理のままに抜け出され、有利な結果、不利な結果にめぐりあうことになりましょう。人間にとつて運命はさけて通れない現実をもたらします。禍福はあざなえる縄のごとしと言われるように、人間の生涯には幸運と不運とはたちかわりいれかわり訪れてくるものでしょう。幸運に恵まれるものごとくはうまくすすみ、不運に出あうと不利な結果を生じるのです。第四の要因には人間の努力があげられます。問題に直面したとき、その問題解決に対して努力を傾注するか放棄するかによって結果は自ずと決まるでしょう。努力の有無が成功か不成功と関係します。

この四つの要因、人間が遭遇する問題の難易度、自己の能力、運不運そして努力の有無が人間の行動を支

配し、人生における課題解決に関係すると思われます。さらに、この四つの要因は客体側には問題の難易度と運不運があり、主体側には能力と努力があり、課題と運命は外部から自己に与えられ、これに対して内なる能力と努力が働きます。また課題のもつ難易度と能力は一定の安定性がありますが、他方、運命と努力はこれに比べると不安定な要因と言わねばなりません。

人間の生涯はこの四つの要因がからみあつて成り立っていると考えることができます。社会と自己、環境と主体、他人と自分との対立するなかで人びとは対処の日々を過ぎねばなりません。厳しく苦しい環境や状況、思いもかけない競争相手や敵と遭遇することもあります。一方、楽しくやさしい境遇に住いし、心ゆるせる友人と共に交わることもあります。自分をとり囲む環境のもつ困難性がこれに対峙する自己の能力、さらにそのときに与えられる運命と自分の努力が重なりあつて生きているのであります。

われわれはつねに課題に遭遇し、その解決に時をすごします。大きな壁、障害に直面し、どうにもならぬ挫折感、敗北感を味わうこともあります。自分の能力をはるかに超えた現実におかれて自己を見出すこともあります。さらに不運にみまわれ、努力の限度を超えて無力感におち入ることもしばしばあるでしょう。友は去り、孤独感にさいなまれることもあります。イエスは十二人の弟子たちとともに伝道の日々をすごしていましたが、その最後のときに、弟子たちのすべてに捨てられ、裏切られました。司馬遼太郎氏もその作品のなかで、わが国の戦国時代にことよせて、日本人が正義という倫理が稀薄であったとは考えられず、キリシタン殉教の史実を見ても裏切りは日本人の天性ではなかった。しかし源平以来、武家の正義―正確には論理はその所領の保全のみが軸になっていた。このことは関が原、戊辰戦争までつづき、大名たちが離合分散する場合の個々の判断の基準は、常に正義ではなくて勝ちそうな側につくということにあった。正義という本来いかがわしい觀念が歴史の上において、人類に多大の幸福をもたらしたのかそれとも逆であ

るのかということ、なお現在でも結論の出ない困難な論題であるという謂を語っています。これはまことに厳しい見解であると思いますが、人間は正義という倫理をかけたがら、実のところ領土の保全、自己主張や党派の保存の外なものでもなく、正義を声高く主張するだけにむなしく響くものであります。

わたくしは昨秋、東北の盛岡に流れる中津川で長い海洋を旅し終え、年を経てから再び出生の地にもどり激流に抗して産卵のため遡上する鮭の姿を見ました。川底の石に身を打ちつづけぼろぼろになりながら、力をふりしぼって生命の最後を生きる様子に心うばわれました。人間は意味の世界にいます。言葉や共同社会のなかで、現実のもつ意味を知って生きています。それだけに意味は欲望や野心、そして死や生をいかようにも色づけてしまいます。ときには死や生を否定的にとらえ、あの中津川の鮭のように素直にすべてをかけた生きることとはできず、まして正義という観念や意味を利用する道にさえ走ります。三年前に生じた阪神淡路大震災のことを思います。現在、都市の建造物の多くは再建され、新しい装いを整えてきています。復興が目に見えて進んでいることはうれしいことであります。しかし災害に遭遇された方がたの精神的、また経済的社会的被害や重荷はなお途えることなく、体験しない者にはわからない重い思いのなかにおられることでしょう。人類の歴史は不慮の災害、戦争、争い、不幸そして矛盾にみちています。人の生涯の歴史も同様であります。正義という思想と行為とをもとめながらその現実はまだことに道遠く虚飾にみちたものである場合に出会います。お互いに人は苦悩にみちて生き、そして人間としての生きざまを見せています。人類の歴史も重層する矛盾のなかに豊かな文化を築き上げてきました。これから苛酷な社会に旅出たれるみなさんが明るく、試練に耐えて真実のあらわれるときを待ち望み、互いに理解する努力を重ねたいと思います。「美しい人生を築きたければ、常に今を感謝して楽しむことだ。とくに人を憎んではならない、未来のことは神に委ねよう」というゲーテの言葉を思い出します。

「他日雄飛スルノ策 ナカルベカラス」



岩山太次郎
大学長

学士、修士、博士の学位を受領され、同志社大学をあるいは同志社大学大学院を終えられ、それぞれ次の新しい世界に進まれることになりました皆さんに、心からお祝いを申し上げます。

大学や大学院には学則というものがあります。それらの冒頭第一条には、大学はあるいは大学院は何を目的とするものであるかが規定されています。

同志社大学学部学則は「教育基本法にのっとり、学校教育法の定める大学として、学術を教授研究し、あわせてキリスト教の特色を發揮し、国家社会に有用な人物を養成することを目的とする」とあります。また同志社大学大学院学則には「学問の自由とキリスト教的精神を尊重して、学術の理論および応用を教授研究し、その深奥を究めて文化の進展に寄与することを目的とする」とあります。これらの目的を果たすために

同志社大学は、その設立の旨意にうたわれていますように、学生一人ひとりが、「独自の気象を發揮」し、「自治自立の人」として、それぞれの専門分野で身につけられた学識を發揮し、社会に有用に働き、文化の進展に寄与する人物を送り出すことを念願し、それに努めているのであります。

それぞれの学位を受領されました皆さんは大学や大学院がその目的とすることを果たすことができる人物であると、学ばれた学部や大学院研究科が認定し、その印として同志社大学から学位を授与されたのであります。皆さんはそういう資質を持った人物であることを自覚され、それを誇りとされることを願うのであります。

皆さんがこれから社会において、文化に寄与するということは、ただ漠然と未来を視野に入れて、何かを行おうというような単純なことではありません。過去、現在、未来を統合する精神性、思想性、宗教性が必要であると思います。特に今日のわたしたちの社会のように、昏迷した社会においては、過去、現在、未来を統合するような精神性が強く求められていると思います。

今日の社会の昏迷は、第二次世界大戦前後のイギリス社会やヨーロッパ社会の昏迷とよく似ているように思います。アメリカ生れでイギリス人となった詩人で批評家のT・S・エリオットが、一九三九年ケンブリッジ大学で『キリスト教社会と理念』という講演を行いました。スペインでは一九三六年より内戦が始まっています。イギリスのチェンバリン首相は一九三八年九月にはミュンヘンでヒットラーの要求を受入れました。ドイツは一九三九年にポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が勃発しました。そういうイギリスやヨーロッパの状況のなかで、T・S・エリオットは恥かしさを覚えただけでなく、西欧文明の崩壊感を強く抱き、イギリス社会がネガティブな社会になっていることを彼は嘆きました。産業社会の発展のため、無感覚な市民が多く出現していること、ヨーロッパは民主主義が抱えている弱点を露呈していることを憂い、今こそ、文化のポジティブな面が求められなければならない、と言います。そのためにはキリスト教が国家や政

治の大きな枠として働き、秩序を生み出さなければならぬ、とT・S・エリオットは考えました。その講演の中で、T・S・エリオットは社会を改良する具体的な施策を言っているわけではありませんが、自然と人間の適切な関係を求めたのであります。

またT・S・エリオットは、一九四〇年より『四つの四重奏』という長編詩を発表し始め、一九四三年にそれを完成、出版しました。この長編詩の中心テーマは永遠性をめぐるものであります。T・S・エリオットによれば、永遠性というものは流転する万物の根本原理を支えるもので、それに到ることは没我の状態において、普遍的な場において、これをT・S・エリオットは「空無の場」と言っておりますが、この普遍的な場において、過去と現在と未来を含む超時間次元において、永遠性は初めて可能である、と言います。それは、キリスト教で言うところの超時間的なものであり、これを彼は絶対的な真理であると考えました。そして次のように言っています。

現在の時間と過去の時間も

おそらく未来の時間の中に在って、

未来の時間は過去の時間に含まれている（徳永暢三訳）

日常世界の常識的な線的な時間の流れを否定して、「永遠の相の下に」捉えた一瞬の「静止した時間点」が過去と現在と未来を含む超時間の次元である、と言います。目覚めた意識のみが過去の経験を現存在となし、未来を現在化することができる。刻々と過ぎゆく時計時間は無時間化され、一瞬々々のうちに捉えられる「今」のみが、永遠の時間となる。この長編詩の終りで、

いわゆる始まりは屢々終りであり、

終ることは始まることである

と、T・S・エリオットは言っています。

わたしたちは明日の社会を「永遠の相」の下で想起しなければなりません。歴史性の上になつて、未来を想起しなければなりません。この認識がないため、社会も世界も昏迷するのである、とT・S・エリオットは言うのであります。

一八八九（明治二十二）年秋、医師の反対を押しきって、大学設立資金募集のため上京していた同志社の創立者新島襄が英学校五年生であった横田安止宛の手紙（十一月二十三日付）で「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ」と記したことは有名であります。その一カ月前にも同氏に書面を認めています（十月二十五日付）。その中で新島は大隈重信外相の遭難、黒田清隆総理大臣の辞表提出等政情不安定な時に、「当今天下之実況ヲ見、弥、時危思偉人ノ語ヲ想起シ、偉人之勃乎トシテ起り来ラン事ヲ切望致し居候」と記しています。そして書面本文には次のような一節があります。

余り天下之大事に対し無頓着ナルハ決シテ取ルヘキ所ニ非ラス、何卒書生之修学中ハ勉強ニ汲々タルヲ以テ他事ニ関スル能ハスト雖、常ニ眼ヲ開キテ天下之真想ヲ監察シ、志ヲ励マシ、鋭ヲ養ナイ、胆力ヲ練リ、勇氣ヲ蓄ヘ、他日雄飛スルノ策ナカルベカラス、我カ同志社ヲ以テ将来小玩器之製造場トナラサル様、生徒諸士ニモ精々御注意有之度候、是レ小生之日夜我カ邦家之為ニ祈リテ止マサル所ナリ

ここには新島が永遠性の認識の必要性を促していることがうかがえます。

これからの社会をポジティブな文明社会にするためには、没我の状態での永遠性の認識こそ、物の根本原理、真理に到る認識として、大切であると考えます。皆さんがこれからどのようなことに当たられる時にも、没我の状態で、静止した時間点において、普遍的な場において、判断され、行動されることを望むのであります。それをなせる人物こそ、「国家社会に有用な人物」として、「文化の進展に寄与すること」になるのであると思います。これが同志社大学が皆さんに期待していることであります。

皆さんの学位の受領、おめでたく存じます。

卒業生に

贈る
言葉

いつまでも心の中に キャンパスを



児玉実英

女子大学長

このたびは無事ご卒業おめでとう存じます。皆さん方は、在学中には、キャンパスの内外でいろいろな出会いがあり、さまざまな経験をし、それらが記憶の断片となって、多くは皆さん方の中に、まばゆいように残っていることでしょう。なぜそれらが、まばゆく残っているのか、それは、そのときどき、皆さん方がその経験から、なにかを学びとったからなのでしょう。そのような心のキャンパスをいつまでも皆さん方の中にもち続けていただきたい、というのが、今日の私の皆さん方に贈るメッセージの一つです。

先日、神戸のある会合に―実は同志社校友会神戸支部、同窓会芦屋西支部、阪神東部支部、神戸支部合同

のクリスマス・パーティーに招かれたときのことで。同志社の先輩である土井たか子さんにお目にかかりました。その折、栄光館やジェイムズ館が話題になり、私はレンガ造りのジェイムズ館について、女子大学としては保存することを決め、創立百二十五周年記念事業の一つとして、募金をすることにしているといったことを話しておりました。すると殊のほか彼女は喜んで、それはよかったとニコニコしておられました。

それというのも、土井さんは実はその席のスピーチの中で新島襄先生の「良心の全身に充滿したる丈夫の起り来らんことを」ということばを引用して、同志社はすばらしい大学だといった主旨の話をされたのですが、そのとき彼女も、その場にいた多くの人々も、同志社大学の正門を入ったところに建っているあのこゝろが刻みこまれた碑を思い起こしていたのです。あの碑のある同志社のキャンパスの風景を心に描きながら皆、大変感激して、中には涙ぐむ人もいました。

同志社の建物やキャンパスは、同志社で学んだことを思い出すひきがねになるのです。心の中にキャンパスをもち続けてほしいというとき、私は、一つにはそうしたことを意味しているのです。心の中にキャンパスをもち続けてほしいというとき、私は、一つにはそうしたことを意味しているのです。

しかしそれだけではありません。私はもう一つ別の意味をも考えているのです。卒業後も、心の中にキャンパスをもつごとく、心の中に学生時代のような若々しさと吸収力をもち続け、これからも、自分でいろいろな勉強をし続けてほしいということなのです。

二十世紀末は十九世紀末に比べて、大変な速度で変化している時代です。情報や価値観や物流のスピードや量は百年前と比較できないほどです。二十一世紀はリニアカーの実用化が象徴的ですが、さらに加速されるようすです。社会の組織やしきみも変わっていきます。日本はグローバルな基準に対応できるように、伝統を守りながらも制度や機構を変えていくことを考えなければ孤立してしまいます。ジャパン・パッシングやジャパン・パッシングを超えてジャパン・ナッシングになってしまうと警告を発している人たちもおられ

るようですが、ナッシングにならないまでも、パッシングされて困るのは、実は日本だけではないのです。世界のあらゆる国や社会が国際基準に合わせるよう、そのしくみをどんどん変えていく時代です。「勝者は常に事態を冷静に分析し解決策を見出し、敗者はいつも問題点のみを指摘するにとどまる」と、ある財界人が書いています。勝ち負けは別として常に私たちは学び続け、考え続け、解決策を見出し、大切でしょう。しかし自分さえ生き残ればよいという考えは困ります。「しあわせ」ということは「幸」という漢字を使いますが、俗に「仕合わせ」と書くことがあります。互いに「仕え合う」ことがしあわせなのだという意味です。

皆さんの未来に本当のしあわせがありますように、また神よりの恵みが豊かにありますように。そして心の中にいつまでもキャンパスをもち続けられますように、これが私のメッセージです。

最後にもう一言、イギリスの詩人エドモンド・スペンサーのことばを付け加えさせていただきます。「人生は石材なり。これに神の姿を彫刻するも、悪魔の姿を彫刻するも、各人の自由なり」。これから社会人としての人生を歩みつつ、皆さん一人ひとり、すばらしい姿を彫刻してってください。